

理解社会学と方法論的個人主義

——社会的行為理論の観点から——

佐藤 嘉一

内 容

- 1 はじめに
- 2 理解社会学の方法論的特徴
- 3 理解社会学の方法論的意義
- 4 むすび

1 はじめに

以下でわれわれが試みるのは、M・ヴェーバーの論文『理解社会学の若干の範疇について』を中心にして、彼の理解社会学の主題と方法の特徴を明らかにし、ヴェーバーの今日的意義を位置づけることの試みである。周知のとおり、ヴェーバーの主要な関心領域は、歴史学・政治学・経済学・宗教学などの諸文化科学が交錯する、いわゆる社会的行為の世界であり、彼はこの世界を取扱う一つの専門科学をのちに「理解社会学」と呼んだのである。理解社会学

という明確な呼称ならびに定義づけがなされたのは、これから問題にする『若干の範疇』（一九一三年）以後のこと、比較的ヴェーバーの晩年に属する時期といえるが、しかし実際にはこれよりもっと以前にこの方法は自覺的に用いられていたとみるべきであろう。一九〇三年から継続的に「文化科学の論理」¹に関する批判的検討という間接的な形で表明された『ロッシャーとクニース』『客観性』『批判的研究』『シュタムラーの「克服」』等の一連の方法に関する諸論文は、内容的にみて若干の力点上の相違がみられるにせよ、すでに理解社会学の圈内に属していると考えられる。

ここでは特に社会的行為の理論に焦点を結び、それをヴェーバーにおける理解社会学の最も重要な理論的主題とみ、この主題成立における諸問題を整理し、その方法論的意味と意義を明らかにしてみたい。われわれのみるところでは、T・パソンズの古典的労作『社会的行為の構造』（一九三七年）等の極小数のものを除いて、意外にこの問題についての立入った検討はなされておらず、それだけに整理すべき事柄は多いように思う。しかもヴェーバーの理解社会学が今日における社会学的行為理論の先駆として、また今日における問題状況・概念枠組の再検討の起点として、十分にその役割を果しうると考えるならば、この作業の意味は決して少くないであろう。

ここではひとまず、ヴェーバーにおける社会的行為の世界とは何か。その方法と対象の諸契機・諸条件を明らかにすることに当面の課題を限定し、以上に論述した問題の一端を解き明す端緒としたい。

- 一、ヴェーバーにおける理解社会学的方法の契機・構造の特質について、
 - 二、つぎに観点を方法論史に変え、その成立当時における方法論的意義を問うこと、
 - 三、そして最後にその今日的意義について若干のコメントを試みることに、
- 以上が本稿の主要な内容である。

2 理解社会学の方法論的特徴

ヴェーバーは、理解社会学の主題が「社会的行為」にあるとし、それを次のように定義づける。「理解社会学にとって特に重要な行為は、ところで1行為者の主観的に思念された意味にしたがつて他の(行為者の)行動に係り、2行為者のこの意味的關係によって行為の経過に参加する、そしてそれ故に3この(主観的に)思念した意味から理解可能な仕方で説明できる、行動である」(W.L.S. 426)と。われわれは、まずこの主題そのものの検討よりも、むしろこの主題への接近方法の特色について問題にしてみよう。次の三点が少くともその方法的特質として指摘できる。第一点は因果帰属の方法の社会的行為分析への適用。第二点はヴェーバーにおける理解的方法の第一の特徴である方法論的個人主義の主張。第三点は、その第二の特徴である方法論的合理主義の主張である。以下それぞれについて、簡単な要約を試みてみたい。

『若干の範疇』を読んで、まず第一に目に入る文章は次の冒頭の一句である。「人間の行動(『外的』もしくは『内的』)には全ての出来事と同様に、経過の諸連関と諸規則性がある。」(W.L.S. 427) この指摘は、一見何の変哲もない指摘に見えて、実は『ロッシャーとクニース』以来、ヴェーバーが大変苦心して方法論の原則にまで高めるにいたった思考上の一大帰結点なのである。このように表現すると大変おおげさに聞こえるかもしれないけれども、この一句にはそれだけの重みがある。たとえばミュンスタールベルグのいわゆる「主観的方法」に抗して、ヴェーバーが社会的行為の世界にも自然界と同様の、法則的連関のあることを積極的に認め、両者の間に一つの連続性を認めたということなども、上述の一句の裏地をなしていることに注目したい。これは、方法論的見地からすれば、以下で問題となる「理解的方法」と並んで、通常慣用的に自然界において適用されている「因果帰属的方法」が社会的行為の世界にも妥当することを明示したものであり、因果的帰属の方法と理解的方法とを二律背反のものとして受けと

める当時の時代傾向を批判的に克服した、ヴェーバーの思考様式を窺う上で一つのポイントになるものである。第二に、次の記述は社会的行為の世界の固有性を指摘しているという意味で特に注目しなければならない。「少くとも完全な意味において、人間の行動にのみ固有なことは、諸規則性と諸連関の経過を理解可能な仕方では解明でき、ということである。」(WL. S. 427-8) すなわち、かれは一方で人間の行動の中に自然との連続性をみながらも、目的と手段、義務・名誉・美・宗教的使命・敬虔にたいする確信、復讐・快楽・献身・瞑想的至福への要求、模倣・習慣といった人間行動の内側に積極的な意義を付与するのである。つまり「主観的意味」とか「動機」と呼ぶ社会的行為の世界に固有のカテゴリの導入によってはじめて意識される「理解」の層に、ヴェーバー流の表現を用いれば、「その閉じこめられている狭い枠を意識しながら、またしてもそのみがなしうることをなす」(WL. S. 546) という積極的な意義を付与するのである。

この理解可能な仕方では解明できる動機層への注目は、ヴェーバーの次のような觀念に基礎をおくものであった。「諸概念によって行為は把握されるものだが、これが(しばしば)確固とした存在^{ザイン}、『もの化した』もしくは自立した『有人格的』形象という布帛をまといてあらわれる。これは言語並びにわれわれの思考の本性に根づくものである。なかならずこのことは社会学においても例外ではない。」(WL. S. 439) たしかに、国家・会社・封建制といった諸社会形象の觀念が「現実の人間行為の仕方において因果的意味をもつ」(WL. S. 539) ということは、デューケームも同様に指摘したところであった。しかしながら、このように一見実在的に見える社会形象といえども、それは「一般的にいえば人間の一定種類の共同行為に関する諸範疇を形容したもの」(WL. S. 439) 「ただ個々の人間の特異な行為の諸経過並びに諸連関である」(WL. S. 538) にすぎない。なぜなら「行為の担い手は個々の人間以外にはないのだから」(WL. S. 538)。それ故、社会学の課題は「これらのものを『理解可能な』行為にまで、という訳は、例外なしに当該諸個人への行為にまで還元すること」(WL. S. 439) 「当該諸個人の『意味』すなわ

ち主観的諸経験・諸觀念並びに諸目的の観点にてらして」(WAG. S. 246) 理解することである。「理解社会学は、個々の個人とかれの行為を最も下位の単位として、——本来どうかと思われる比較を一度だけお許しただければ——『原子』^{アトム}として取扱うが故に、『理解』がしまいにまた基礎となる」(WL. S. 489) のである。「同じ理由により、社会学的考察様式では、個人がまた上方にたいしても限界であり、それが有意味的行動の唯一の担い手である。いかなる見せかけの逸脱した表現様式といえども、このことを誹謗することは出来ない。」(WL. S. 489) 換言すれば、諸集団並びにその歴史、この一見実在的に見える社会的事実も、結局は当該諸個人の特殊な行為の諸経過並びに諸連関であるにすぎないのだから、当該諸行為者の主観的諸経験・諸觀念並びに諸目的といった「有意味的」観点を自覚することこそ事態究明の重要なポイントとなるというのである。

以上のようなヴェーバーの觀念は、総じていえば「方法論的個人主義」の系列に属する考え方である。そしてこの考え方が実はヴェーバーの主張に特徴的な、理解可能な仕方で解明できる動機層への強調というポレミクをうみ、のちに触れるように、客観的意味解釈を原則とする法教義学や、人間の行動を心的事象などの自然的因果連関に還元しようとする心理主義から理解社会学を方法論的に峻別し、それと平行して社会的行為の理論ともいべき彼の社会学理論の一般的枠組の構築に踏みきることになるのである。

ところで、ヴェーバーの社会学的方法に固有な、個人とかれの行為が社会の構造の最下位の単位であり同時に最上位の単位であるという方法論的個人主義の主張には、同時にその内部にもう一つの方法論的主張が含まれていると考えられる。われわれは、それを理解社会学における「合理主義的方法」と呼び、ヴェーバーの方法論の第三の特徴として強調したい。

ヴェーバーによれば、行為者の主観的意味もしくは行動の有意味的根拠としての動機の理解が、方法的に最も容易におこなわれる水準は、合理的水準においてであるという。かれはそのことを「歴史学と並んで社会学は、なにより

もまず『実用的見地に立つて』合理的に理解可能な行動の諸連関から解明する」(W.L. S. 429)のであると表現している。勿論、理解可能性という圈全体は、S・フロイトの精神分析、F・ニーチェのルサンチマンにみられるように、無意識の動機とかその他法悦・神秘的体験・精神病理的行動連関・幼児の行動をも包摂し、その情動の定型的経過とそれの行動に及ぼす定型的諸結果をも理解することが出来る。けれども、ヴェーバーは内的状態もしくは外的行動の一切が理解社会学の主題であるというのではなく、もっぱら方法的便宜主義の見地に立つて、動機圈全体のなから、いわばもっとも用途に適した理念型として、合理的に解明できる行動を選びだし、それを「理解可能な諸行動連関の社会的分析」(W.L. S. 429)と規定するのである。

ところでそのばあい合理的とは何であるのか、これがいささか気になる点である。この合理性問題は、それ自体一つの独立した主題として論考さるべき性質のものであり、ここでは簡単に次の点を指摘しておくにとどめたい。ヴェーバーが合理性について論述する文脈は、(1)行為の理論、(2)理念型論、(3)歴史哲学(「世界の合理化過程」論)などであるが、合理主義的方法もしくは方法論的合理主義というばあいには、とりわけ(2)がもっとも重要な問題となる。すなわちヴェーバーは、社会学の主題が社会的行為の世界にあることを自覚した上で、この対象の構造と変動に接近する方法論として、合理的性格を特徴とする理念型の適用を提言するわけである。

理念型のもつ合理性とは、一般的には一義的明晰性という形式的な性質であり、その内容が有意味的に理解可能な諸連関から構成されるか、特殊没意味的諸連関から構成されるかは、全く観点次第、価値関係次第なのである。(W.L. S. 430)理念型は、研究の目的に応じて、整合型・主観的目的合理的に定位される行動の型・有意味的に理解可能なそれ以外の行動の型・没意味的諸連関によって動機づけられている行動の型等に構成可能であり、決してこれらのうちのある特定のもののだけに限定されるわけではない。しかしながら、以上のことを前提とした上で、就中ヴェーバー自身は整合型や目的合理的行動の型をはじめとする有意味的に理解可能な諸連関の理念型に特別の関心を寄せ

ていることも否定できない。それ故、方法論的合理主義というばあいには理念型一般による経験的諸事実との一致・矛盾・偏差を明らかにする方法であると解されて良いのであるが、狭義には特殊な内容規定を伴う理念型、すなわち客観的「整合型」や「主観的目的合理性」の型といった有意味的に理解可能な諸連関の諸理念型による経験的諸事実の考察を意味しているばあいのあることも注目しておく必要がある。そして前述した「理解可能な諸連関の社会学的分析」とヴェーバーの場合には、とくにこの狭義における方法論的合理主義をさしていると考えられる。

さしあたり、ヴェーバーにおける理解社会学的方法という場合には、われわれは以上の二つの観点すなわち方法論的個人主義と方法論的合理主義の契機が重複し、両者互いにいり混りながら、その重要な一角をなしていると理解したい。ここで一角といったのは、われわれが第一に指摘した因果的帰属の方法が、理解社会学のもう一つの方法的契機として重要な位置を占めているのを無視できないからである。

「解明によって得られる人間行動の『理解』は、まず第一に、ある特殊な、その程度はきわめて多様だが、質的『明証性』をもっている。」(W.L. S. 428) なかでも目的合理的行動すなわち「〔主観的に〕明白と考えた目的にたいして〔主観的に〕適合的と考えた手段に、もっぱら定位するような行動」のばあいは最高度の「明証性」をもっている。(W.L. S. 428) だがしかし、「具体的行動の『有意味的』諸解明は、純粹にそれだけであれば、たとえどんなに『明証性』の高いものであっても、当然のことながらそれは単に帰属の諸仮説であるにとどまる。それ故、有意味的諸解明は、原理的には全ての他の諸仮説がそうであるのと同様の手段で、可能な限りの検証がなされねばならない。」(W.L. S. 437) すなわち解明がいかに高い明証性をもつとしても、それが経験的妥当性を証拠だてることにはならないのである。なぜなら「その外的経過と結果において等しい行動でも、それがきわめて種々の動機布置に基づきえるし、またその理解可能性において最も明証性の高いものが必ずしも実際に働いている動機であるとは限らないからである。」(W.L. S. 428) それ故つねにその動機連関の理解は、それがきわめて明証的解明であるにせ

よ、經驗的に妥當な理解可能な説明となるためには、平常慣用的な因果帰属の方法で、やはり出来る限り、制御しなければならぬのである。このことは『ロッシャーとクニース』においても力説されている点である。⁽²⁾

したがって理解社会学は仮に次のような見解があるとすれば、それについて反論しないわけにはゆかない。その見解とは「『理解』と因果的『説明』とは相互になんの関係もないのだ。だから両者は出来事の全く反対のポールのところでのその研究を開始するのが正しい。とりわけ、行動の統計上の頻度はこの行動に関して意味上『一層理解可能』とするいかなる徴候もないのだし、また極大の『理解可能性』は（統計上の）頻度について何ごととも語らない。それほど大抵の場合、絶対的な主観的目的合理性は、統計上の頻度と相反するものなのだ、といった前提である。」（WL. S. 436-7）この見解（『ロッシャーとクニース』のなかで彼が問題にしたミュンスターベルグやゴットル等がその提唱者である）は、以上の方法的処理を無視するばかりでなく、更に次の事項、すなわち「有意味的に理解される精神的な諸連関やとりわけ目的合理的に方向づけられた動機の諸経過が、社会学にとって因果連鎖の諸環、その因果連鎖はたとえば『外的な』環境規定にはじまり、最後はまたふたたび『外的な』行動にいたるのだが、その諸環としての役割を完全に果してゐる」（WL. S. 437）ということをも拒否してしまうからである。「解明的諸仮説によつてその中に目的合理的に方向づけられた諸動機が挿入される因果連鎖は……直接統計的に再検証しうるし」、逆に「統計的諸データは、それらが何らかの理解可能な仕方で解明できるものと結びついている、行動の経過なり諸結果を述べる場合には、具体的事例の中で実際に有意味的に解明されてはじめて『説明』となるのである。」（WL. S. 437）ヴェーバーの社会学における方法的課題は、しばしば社会的行為の「目的論的関連の因果関連への組みかえ⁽³⁾」とか「主観的方法の確立⁽⁴⁾」の問題にあると指摘されているが、それは以上に要約した方法論的個人主義並びに合理主義を基軸として推進される「理解的方法」を挿入した社会的行為に関する「因果帰属の方法」を意味するものと解されるべきであらう。

この方法的課題は、主観的に思念された意味を自然的諸連関・諸規則や客観的に妥当な意味から峻別し、前者こそが社会的行為の世界を主題とする社会学の固有のカテゴリーであり、それは外的諸環境要因と並んで歴史の安定と變動における因果連鎖の環となるところに意義がある。これらのことを方法的に論理的に明示化する試みにあった。それ故一方では、この『若干の範疇』は社会的行為の科学に関する社会学の自律性、というよりも行為の科学一般の方法的基礎を確立することに志向し、他方では、社会と歴史の構造と變動に関する一視点を理論的にも実証的にも明らかにすることを意図して執筆したとも解せられる。そこで以下の『若干の範疇』を中心に社会的行為の理論の観点から、理解社会学的方法論的意味を再検討することにした。⁽⁵⁾

3 理解社会学的方法論的意義

ヴェーバーの理解社会学が社会的行為理論の基礎をなすということは、鋭く新明正道氏が指摘しているとおりである。ところで方法論的個人主義と方法論的合理主義の結合によって理解的方法を結実させ、その主題として社会的行為の世界を意識したのは、新明氏も指摘するように、たしかにヴェーバーにのみ固有のものというより、当時の社会有機体論——それにつけ加えて自然主義思想——からの離脱化という時代趨勢が一枚加わっていたことも否定しえない事実である。現にヴェーバーが『若干の範疇』冒頭の脚注のなかで、『歴史哲学の諸問題』におけるG・ジンメル、『自然科学的概念形成の諸限界』におけるH・リッカート、『精神病理学総論』におけるK・ヤスパース、『言葉の支配』におけるF・ゴットル、さらにラートブルフ、フッサール、ラースクなどの名を挙げ、これらの人達から方法的なものものを批判的に学んだこと、さらに用語の上では、F・テンニエスの『ゲマインシャフトとゼゼルシャフト』やA・フィアカントを参照していると述べているところからも、それらの一端を窺うことができる。

こうした反實在主義的な時代趨勢のなかで、ヴェーバーが理解社会学という社会的行為の基礎理論を提唱したこと

は疑いのない事実であつて、それが今日の意義をもつのは、「この時代的趨勢の基本的な特徴を最も首尾一貫して特徴づけているからにほかならない。」

われわれは『若干の範疇』にみるヴェーバーの方法論的主張をこうした時代的趨勢のなかに位置づけた場合、具体的にはそれを心理学並びに法教義学にたいする彼の意見表明の中に読みとることができる。以下ヴェーバーのこの問題にたいするボレーミクを要約してみることにしよう。

先ず、理解社会学と心理学との關係について。ヴェーバー自身は、それを次のように要約している。「理解社会学にとって『心理学』との關係は、ケース・バイ・ケースに異っている。客観的整合合理性は經驗的行為に對して、有意味的に理解可能なものは理解不可能なものに動機づけられた行為に對して、理念型としてそれらに役立っている。つまりそれ（理念型のこと）との比較によつて因果關連的諸非合理性（そのときどきに應じて言葉の意味は異っているが）は、因果歸屬に合目的とされるのである」（W.L.S. 486）（傍点筆者）。さて含蓄豊かなこの要約をわれわれはどのように解したら良いのであらうか。

當時心理学といへば、周知のように、ヴントの『民族心理学』に代表される、きわめて客観化的傾向の強い自然主義思想がその主流をなすものであつた。心理学は、物理学・化学・生物学と並んで「歸納」「假説の構成」「事實」による假説の檢証といった「法則科学的」研究のグループに位置づけられ、原則として人間行為を一連の精神物理的な基本過程へ解消するいわゆる心理還元主義が方法として採用される傾向にあつたのである。ヴェーバーが、『ロッシャーとクニース』論文でヴントの「創造的合成」について特に批判的に論考していることから推察しても、彼の心理学論はとりわけこのヴント主義の心理学を念頭に置くものであつたことは予想されてよい。文中における「因果關連的非合理性」とは、ヴント主義の心理学の主題である精神物理的・心的事象それ自体の因果考察を含む、内容的には文中の「經驗的行為」「心理学的に理解可能なもの」「理解不可能なものに動機づけられた行為」を心的事象か

ら因果的に説明する普遍化的法則定立的作業の謂であらう。

しかし心理学的考察の特徴についてヴェーバーのこの要約は直接何も語っていない。そこで『若干の範疇』によって以上の指摘をいくつか補足する必要がある。少々長くなるが次の文章を引用しよう。

「激昂した行動やその行為過程に、それ故間接に、関連的な諸『感情状態』、たとえば『体面意識』『自惚』『嫉妬』『猜疑心』なども亦、外的世界や特に他者の行為に主観的有意義的にかかわっている。理解社会学はしながらこの場合、生理的またさらにはいわゆる『精神物理的』現象諸形態、たとえば脈搏曲線とか反応テンポの推移などに関心をもつものでもないし、またなまの心的所与、たとえば緊張・快・不快感に関心をもつものでもない。——これらによっても、無論それら(激昂した行動のこと)を特徴づけることができる。——しかし理解社会学は行為の定型の意味連関をこそ問題にするのであり、それ故に(理解社会学は)それ(定型の意味連関)を——周知のように——理念型として目的合理的なものの諸影響を査定するために用いることができるのである。行為の(主観的に思念された)意味連関を、人間行動の『内側』と呼ぶなら、——これはためらいを感じる表現だ!——その場合にのみ、理解社会学はかの諸現象をもつばら『内側から』考察するのだと言うことができる。しかしそのことは決してそれらのものの物理的もしくは心理的諸現象のカタログによって考察することを意味しない。ある行動の心理学的諸性質の違いそれ自体は、それ故われわれには全くどうでもよいことである。意味連関が等しいということは、決してそこに働いている『心的』構造布置が同じであることと結びつかないのである。」(WL. S. 429—30)

この文章と先ほどのヴェーバーの要約とを関連づけて考察すれば、ほぼ心理学の意味並びにそれと社会学との関係が理解されるであらう。すなわち、ヴェーバーは社会学がもつばら行為者の主観的意味連関の見地から人間の行為を解き明すという方向をとるのに対して、心理学は、いわば没意味的因果連関の見地、精神物理的・心的事象の構造布置という観点から人間の行為を因果法則的に説明すると解しているわけである。

この心理学に対するヴェーバーの方法論的主張の要点は、心理学主義・心理還元主義の社会学への適用拒否、社会学的方法のオートノミーの宣言にあり、内容的には前節に要約した方法論的個人主義と方法論的合理主義の建設的な提言を意味している。注意しなければならないのは、方法論的個人主義並びに合理主義の提唱——これこそ「理念型」的合理性を手段にした理解社会学の方法的独自性なのだが——が、決して心理学や心理学主義の効用を無視したり、その存在理由を拒否していないということである。それは、たとえば、精神分析・ニーチェのルサンチマンの思想・経済的唯物主義の理論などに、「これらは通常利害関心状態のプラーグマから、ある内的もしくは外的事態の客観的な合理性——理解可能な根拠からすれば『疑いの余地あるもの』であるが故に、不十分にか全く認められない——を推論する解明である」(W.L.S. 434)として、一定の役割を認めているのと全く同じなのである。理解心理学に対する態度もこれと異っていない。⁽⁸⁾

ところで、以上によってほぼ心理学の意味は明らかとなったが、必ずしも理解社会学と心理学との相互提携の問題は解き明してない。ヴェーバーは前の文章から一つ置いて、それを次のように記述している。「他者の行動に主観的に関係づけられた意味というものをまたない諸経過は、……社会学的に全くどうでもよいというのではない。反対にその諸経過が、決定的な諸条件、それ故行為の規定根拠となりうるのだ。理解諸科学にとってきわめて本質的部分にまで、まさしく行為は、本来没意味的な『外界』に、諸事物や自然諸過程に、意味的に関わっているのである……たとえば理論的に構成された孤立した経済人の行為は、もっぱらそうである。しかしながら、出産数や死亡数の推移、人類の淘汰過程といった、主観的『意味連関』を欠いた諸経過との関連性は、生の心的諸事実と同様、理解社会学にとって、意味的行為がオリエンテーションする『諸条件』並びに『諸結果』としてその役割を演ずるにすぎないのである。」(W.L.S. 430—1) (傍点は筆者) つまり、ヴェーバーは、心的諸事実は理解社会学の主題である社会的行為の解明に無関係というのではなく、それを解明するうえで、その「諸条件」「諸抑圧」「諸促進」といった機能

を果すとするのである。ヴェーバーの遺伝論は以上のことを理解するうえで参考になるだろう。

「たとえば遺伝の諸経過は主観的に思念された意味といったものからは決して理解できない。それらが当然ただそうであればあるほど、それらの諸条件の自然科学的確定は一層精確となる。例として——ここでは意識的に『しろうとの立場で』論述する——一定の社会学的に関連する諸性質や諸動因の存在程度（それはたとえば社会的権力追求心の発生とかこれを達成するチャンスとかに恵まれているといったことである）……一般的には行為の合理的志向能力とか特にそのほか提示できる知的諸性質といったもの——が、頭蓋指数もしくは一定指標で示すことのできる特定人間集団の血統と、近似的に明白な連関があることを将来において確定することができたとしよう。このような場合、理解社会学はこの特殊な事実を、たとえば定型的な年令諸段階とか一般に人間の寿命といった事実と全く同じように、その研究にあたって自明のこととみなすのである。」（W.L. S. 431）

しかしこの確定自体は理解社会学の課題でないことは勿論である。そしてこの得られた成果を自明のこととして前提しつつ、ヴェーバーによれば理解社会学はこの遺伝という事実について、次のような形において関わるというのである。すなわち「理解社会学の固有の課題は、厳密には1例の特殊な遺伝的諸性質を与えられた人びとは、それによって左右され、もしくは引き立てられる自分たちの指向性^{シヤクトレイベン}の内容を、どのような行為によって、つまり外的世界であれ固有な内的世界であれ、諸目標に向って意味的に関係づけられる行為によって貫こうとしているのか、又どの程度そして何故にそれは成功しもしくは成功しなかったのか——2この（遺伝によって規定された）指向性は、更に意味的に関係した他の人びとの行動にたいして、どのような理解可能な諸結果をもたらしたか？以上の点を解明的に説明できてはじめて成り立つのである。」（W.L. S. 431）

遺伝に関するヴェーバーの見解は以上のようなものである。没意味的行動現象の構造的因果的分析自体が理解社会学の主題なのではなく、その主題はあくまでも社会的行為なのであり、当該社会的行為に関わる限りにおいて、それ

らは問題となり、しかもその場合でも没意味的因果連関（最初にヴェーバーの要約を紹介したが、そこでの「因果関連的非合理性」という言葉と同じ意味である）は、所与、前提条件となるだけだというのがヴェーバーの主張なのである。

これらの文脈をとおして明らかとなるように、ヴェーバーの方法論的個人主義並びに合理主義の社会学は、心理学主義・心理還元主義との関係を明示化する作業をとおして、社会の構造と変動の自然主義的解釈から人間中心的解釈への、即ち社会的行為理論への転換を一つ準備することとなったのである。

ところで、われわれのみるころでは、ヴェーバーの理解社会学と心理学をめぐる以上の論議は結局のところ社会学の主題である社会的行為の世界の有する流動的性格の故に起因するものと解される。この社会的行為の世界の漸次的流動的性格についてはヴェーバー自身も様々の個所において指摘しているところであった。たとえば「社会学では1多かれ少かれ平均的にえられる整合型、2（主観的に）目的合理的に定位される型、3多少とも一義的に目的合理的に定位している行動、4目的合理的ではないが、有意義的に理解可能な連関において動機づけられている行動、5多少とも意味的に理解できるが、理解不可能な要素によって程度の差こそあれ著るしく妨げられもしくは規定されている連関によって動機づけられている行動、6全く理解不可能な人間の『内に』並びに『外に』ある、心的もしくは物的諸事実、これらが全く流動的推移によって結合しているのである。」（*W.L. S. 435*）

社会的行為の世界の有するこうした漸次的流動的性格の故に、方法論的には心理主義的見地も理解社会学の見地も双方同時に成立する可能性があるわけである。ヴェーバーのポレミクはこのことをはっきりと自覚したうえで、方法論的個人主義並びに合理主義の道、別言すれば理解社会学のもしくは行為的見地を社会学の道とし、方法上の専門化・分業化を試みた点に求められるのである。この主張は『ロッシャーとクニース』にはじまり、ウェーバーの最後の方法論である『基礎概念』にいたるまで首尾一貫して論述されている。⁽⁹⁾

ヴェーバーの心理学主義・ヴント主義の心理学からの方法的訣別は大体以上のようなものである。われわれは次に法教義学との関係をみることによって、ヴェーバーの方法論的個人主義並びに合理主義のもつボレーミクの別の側面を明らかにしたい。まず先例にならって、ヴェーバー自身の要約を記すことから始める。

「社会学で『法』が考察の対象となるかぎり、（法教義学とは異なり――筆者挿入）『諸法命題』の論理的に整合的な『客観的』意味内容の吟味に関わるのではなくて、行為に関わるのである。そのさい行為の諸決定因並びに諸合威力として、当然のことながら特定の諸法命題の『意味』および『妥当性』について人びとが抱く諸観念が、特に重要な役割を果すのである。そのことを、従ってこのような妥当性観念の事実的存在を確認することを、社会学はただ次のようにして行うのである。すなわち社会学は 1 この諸観念の分布状態の蓋然性をも考慮する。そして 2 特定の**人**びとの頭脳の中には、妥当性のあるものと判断される『法命題』の『意味』について、そのときどきに経験的に規定される諸観念が支配している。これらのことを考慮することによって、社会学は一定の明示できる状況のもとで、特定の『諸期待』に準拠して行為は合理的に定位されることができ、従って具体的な諸個人に特定の『チャンス』を与えるとの結論を与える。このことによって個人個人の行動は著るしく影響されうるのである。これが『法命題』の経験的『妥当性』という概念的社会的意義である。」（W.L. S. 440）

ヴェーバーのこの要約にみるかぎり、法教義学的思考パターンの特徴は、法命題の客観的意味解釈すなわち法命題に関する論理的に整合的な客観的意味内容の考量に求められる。これに反して社会学は、法命題という妥当性観念の事実的存在の確認、法命題の経験的妥当性という行為的観念が問題になるのである。さて、この指摘の方法論的意義はどこにあるのであろうか。問題に立ちいるまえに、法教義学における法命題の論理的に整合的な「客観的」意味解釈の概念的意味を補足しておく必要がある。

この場合以上の要約とほぼ同様の考察を試みている『ロッシヤーとクニース』論文が参考になる。¹⁰⁾この論文によれ

ば、法命題の論理的に整合的な「客観的」意味解釈とは、「定義さるべきX」という概念は、この概念を利用しもしくは前提するところの実定的諸規範が全て矛盾せずしかも意味に、併存しかつ相互に存立しうるためには、どのように思惟されねばならないか」(WL. S. 586—87)といった一種の目的論的思考の謂である。それ故この思考パターンの特徴は、法命題同士の概念的コンピネーション「観念上の妥当性要件」(das ideale Gelten-wollen)を専ら追求する点にもとめられ、典型的な概念実在主義を標榜する。法教義学は、実在の因果的解釈とは何のかかわりもないのである。

ヴェーバーのポレミクは、経験の実証科学としての理解社会学をこの法教義学的概念実在主義の楔から解き放ち、「経験的なものと規範的なものとの救いがたい混乱の危険」(WL. S. 343)から脱却する方法論的基盤を確立する点にあった。この点は先のヴェーバー自身の要約にも窺われるところである。それは、ヴェーバーが『ロッシャーとクニース』『シュタムラーの「克服」』論文といった一連の批判的研究をおして到達した方法論的帰結点であった。それ故その論点の一端を、もう一つ『シュタムラーの「克服」』論文の一節から引用してみるのも無意味ではあるまい。かれは民法典の条項をめぐる解釈の多様性から問題提起をはじめめる。

「民法典の一定『条項』は、いろいろの意味で考察対象になりうる。まず法政策的に……ひとは諸倫理綱要の点からその規範的『資格』の有無を、更に特定の『文化諸理念』とか政策的、——『権力政策』的あるいは『社会政策的、——綱領の点から当該理念の達成にとってそれが有価値か無価値かを、あるいは亦『階級的』もしくは個人的利害の観点から、この利害にそれが『利益』か『損失』かを討議することができる。」(WL. S. 345) この評価的態度の多様性に関するヴェーバーの論議は立ちいらぬことにして、われわれは当面する問題にのみ関心を限定しよう。ヴェーバーは前述の条項に関して性質を異にする二つの疑問をたてることができるという。すなわち一方は「それは概念的に何を『意味』するか」であり、もう一方は「それは経験的にどう『作用』するか」である。

「この二つの疑問にこたえることは、その条項の倫理的・政策的等々の価値問題の生産的な討論の前提である。これはそれ自体一つの事柄である…それ故当然『価値』の問題は、全く自明のことだが、この二つのいま論じた疑問とは厳格に区別すべきものである。われわれは、そこでこの二つの疑問の論理の本質を吟味する。二つの場合とも疑問文の文法上の主語は…『それ』すなわち当該『条項』である、——けれども、両者は全く相違した、この『それ』に隠れている対象を問題にしているのだ。前者の場合『それ』すなわち『条項』は、いまや増々広範囲に法律研究者によつて精鍊される、純粹にイデー的な、概念的分析の対象として取扱われる、いわば文章に表現された觀念の組合せである。後者の場合、『それ』——『条項』——は、まず第一に次のような經驗的事実である。すなわち『民法典』と呼ばれる冊子を手にとるものはだれでも一定個所に一樣に印刷文をみ、その印刷文によつて彼の意識の中に、經驗的に教えこまれた『解釈』の諸原則にしたがつて——多少とも高い程度の明晰性と一義性をもつて——一定の外的行動を惹きおこしうる、いわば實際的諸帰結についての一定觀念が呼びおこされる。この事情はさらに次のような經驗的に規則的な——よしんば實際には例外があるにせよ——結果をもたらす。すなわち一定の心的並びに物的『強制裝置』が、一定の通例『裁判官』と呼ばれる人びとを擁護し、この『外的行動』はある具體の場合に生ずるべきであつたもしくは生ずるべきである、という意見を一定の仕方で提出できるようにする。またそれ（『条項』）は更に次のような結果をもたらす。すなわちこの『裁判官』と呼ばれる人びとがこうした努力を煩わさなくとも、各人はかなり高い蓋然性において自分にたいする他者の一定行動を『計算』できるといふこと、——換言すれば、各人は一定チャンス、たとえば対象について實際上自由な処分を勘定できるといったチャンスをもつといふこと、そして各人はいまやこのチャンスを根拠にして生活を営為しえまたそうしているといふことである。当該『条項』の經驗的『妥当性』は、したがつてこの後者の場合には、經驗的・歴史的連関という實在における錯綜した一連の因果連鎖、すなわち特定のペーパーが特定文字で覆われているという事実によつて惹きおこされる人間同士のまた人間外的『自然』に対する現**実**的、な

行動を意味しているのである。これに反して上述した最初の『理念的』意味での法命題の『妥当性』は、『法律的真理』を欲するものの学問的知識のための、概念相互の組合わされた思考的關係・法曹のための一定の思考プロセスの『妥当性基準』(Gelten-Sollen)を意味している。(WL. S. 346—47)

少々引用が長くなった。要するに、ヴェーバーは「法律的真实」とは具体的に何であるのか、すなわち『学問的』原則そのものに則して思想上なものが『妥当』すべきであるか、あるいは『妥当』すべきであつたか」という法教義学の問題は論理的にみれば次のいわば理解社会学の問題とは全く異質だといふのである。「ある具体的事例もしくは多数の事例において、なにが事実上経験的に一定『条項』の『妥当性』の因果的『結果』として生じたのか」という問いがそれである。法律は、前者の場合、一個の理想的な思想的に演繹できる規範であるのに、後者の場合、それは程度の差こそあれ首尾一貫した同時に遵守されるものとしての一個の「確認できる具体的な人間たちの行動準則」なのである。(WL. S. 348)

結論を急ごう。法教義学と理解社会学に関するヴェーバーの冒頭の要約と以上の意見をとおして、われわれは、法命題の概念分析それ自体は決して理解社会学の主題とはなり得ず、それがその主題たりうるのは、確かめることのできる行動準則として、社会的行為において一定の因果的影響を及ぼす限りにおいてである。われわれは、このような方法論的視点——論文全体の文脈に関わらせて言い換えると「方法論的個人主義」の観点——を明示化するのに一步接近した訳である。ヴェーバーの法教義学と理解社会学の關係をめぐるボレーミクは、徹底したこの方法論的個人主義の擁護とその確立にあるのであり、概念体系の首尾一貫した演繹は、「教義学」であるとしても、経験的実証科学の圏外にあるのだということを論破する試みにあつたといえる。それは丁度個人並びにかれの行為を心的複合体といった没意味的過程に還元しようとする心理還元主義に抗して、社会学を独立させ、「社会学では『対象』(内的もしくは外的)に対する有意味的に解明可能な行動の闕を下廻る一切のものは、『没意味的』自然過程と並んで、単に条件も

しくは前者の主観的關係の対象であるにすぎない」(W.L. S. 439)と規定した、あの問題意識に対応するものなのである。

すなわち法教義学に典型的な整合合理的意味体系の分析は、系として集合体(たとえば「会社」とか「国家」など)を人格的にとらえる概念实在主義の弊害からまぬがれないであろう。というよりそれを本質とするであろう。なぜなら法教義学は通常「法人格」と呼ばれる集合体の概念的妥当領域を確定することがその主題となるからである。しかし社会的行為の経験的歴史的考察を主題とする社会学は、このような概念实在主義を拒否する。集合体は、行為者の行為の諸動機の一つとして、いわば行為者の主観に受関し、社会的行為の諸過程に組みこまれ、経験的因果連鎖の環として位置づけられてはじめて、その主題となるのである。これが法教義学と区別される理解社会学の立場であり、方法論的個人主義のポレーミクの要点なのである。ヴェーバーがさきの文章について「同じ理由により、この(社会学的)考察様式では、個人が上方に対しても限界であり、それが有意味的行動の唯一の担い手なのである」(W.L. S. 439)と云ったのは、この意味においてである。

4 む す び

われわれは、理解社会学の方法論的特徴とその学史的意義を心理還元主義並びに法教義学的概念实在主義(一種の制度主義)からの分離と相互提携の問題とみ、それを方法論的個人主義及び合理主義の確立並びにその擁護という点に要約した。そして間接的ながら、この方法論はその主題として社会的行為の理論に結実することも強調した。要するに、ヴェーバーの以上のポレーミクは、一方において社会学がヴァント主義的心理学に典型的な心理還元主義・自然主義的因果論に陥ることなく、他方において法教義学にみられる一種の制度主義的体系論に与することなく、両者をいわば社会的行為の経験実証的考察のための媒介要因として包摂できるような一視点—方法論的個人主義及び合理主

義——の可能性を探り、その現実化を試みた点に求められる。

ところで今日、われわれが社会学の方法論的立場として最も有力視しているのは、社会学的機能主義のそれである。勿論その性格と課題がどのへんにあるかは、識者によってなおかなりの懸隔あるところだが、しかしこの立場が今日において最も支配的な傾向をなしている点については大方の一致するところであろう。そしてこの社会学的機能主義の典型として、しばしば引用されるT・パーソンズの体系理論が、かつてヴェーバーの方法論的個人主義をタイプ・アトミズムとして批判し去った地点で成立していることに注目するならば、われわれのきわめて素朴な問いかけは、以下のようなものであるだろう。理解社会学が社会学的機能主義にたいして今日いかなる役割と位置をもつか。それはもはや方法論としてアウト・オヴ・デートなのか。ヴェーバーのポレミクは、今日の段階では社会学における「自明の前提」⁽⁹⁾として位置づけられ、今日の社会学的機能主義はヴェーバーのポレミクより遙かに進んだ地点で展開されていると果して言えるのかどうか、といった問題である。この問題はより具体的にはT・パーソンズのヴェーバー批判と彼の体系論が結果的に成功したかどうかという問題に帰着するであろう。本稿は、いうまでもなく、理解社会学の方法論のもつポレミクの問題性を明示化することを役目とした。従ってこの緊急にしかつ重要な問題については割愛せざるをえない。これについては、他日、ヴェーバーの社会的行為の理論を内容的に吟味する作業とともに、別稿⁽¹⁰⁾において論評を試みたいと思っている。

註

- (1) マリアンネ・ウェーバー『マックス・ウェーバー』大久保和郎訳二四四頁。
- (2) マックス・ウェーバー『ロッシヤーとクニース』(三)松井秀親訳九一頁以下参照。
- (3) 大塚久雄『社会科学の方法』六〇頁。
- (4) 出口勇蔵『ウェーバーの経済学方法論』一五六頁
- (5) 最近、同じような課題が林道義氏によってとりあげられている。同氏、「マックス・ウェーバーの『理解社会学』とその基

『基礎概念』『思想』一九六五年十二月号他、『思想』一九六六年三月号、一九六七年七月号、一九六七年九月号等を参照されたい。

(6) 新明正道「社会学における行為理論の意義―特にパーソンズを中心として―」『社会学研究』二七号一頁～二八頁。

(7) マックス・ウェーバー『ロッシヤーとクニース』(三)松井秀親訳一〇五頁～一二三頁参照

(8) 「理解心理学的研究の全く本質的な部分は、無論目下のところ、まさしく不十分にかもしくは全く気づかれぬ、それ故この意味では主観的に合理的に志向されていない諸連関を暴露することにある。その諸連関は以上のとおりであるが、実際にはあるかなり客観的に『合理的に』理解可能な関連にむかつて経過している」(W.L.S. 483) という記述がそれをしめしている。

(9) ウェーバーの『基礎概念』には、次のような記述がみられる。「社会学の構成概念は、ところで、単に外的のみならず内的にも理念型である。実際の行為は多くの場合、その行為の『思念された意味』を漠然と半ば意識あるいは全く意識しないで経過している。行為者はそれを知っているもしくは『明晰に行う』というよりは、むしろおぼろげに『感じている』のであって、多くの場合、衝動的・習慣的に行為しているのである。行為の意味(それが合理的であれ非合理的であれ)が意識されるのは、きわめてまれであり、しかも諸個人が群をなして同種の行為をおこなう場合だけである。真に効果的に、すなわち完全にかつ明晰に、意味的な行為というものは、実際には、つねにただ限界的な場合だけである。實在の分析にあたっては、どの歴史的・社会学省察も、たえずこの事実を銘記していなければならない。」「實在をその具体性において省察することが問題であるばあいには、つねに理念型との距離その程度と種類を確定せねばならない。要するに、『行為の見地』は、一種の理念的抽象であり、實在そのものではないというわけである。(W.L.S. 548) (阿閉・内藤訳三四～三五頁)

(10) マックス・ウェーバー『ロッシヤーとクニース』(三)三五頁～三八頁。

(16) 佐藤勉「社会学の機能主義の性格と課題」東北大学文学部研究年報第十七号一四五頁～二〇二頁。この論文は、この種の問題を一応方法的個人主義と社会学の機能主義とは両立しうるものとし、社会学の機能主義を前者の発展線上に位置づけようと試みた野心作である。

(12) Talcott Parsons, *The Structure of Social Action*. p. 363-749. *ibid*, *Essays in Sociological Theory*, pure and applied, p. 76-78.

(13) 佐藤勉同右、一五六頁。

(14) 佐藤嘉一「理解社会学の方法論的意義」『社会学研究』二十九号、(新明博士古稀記念号)はそのひとつの試みである。

〔参考文献〕

- 1 Max Weber, Roscher und Kries und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie, in *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*. (改訂 WL. 入聲記)
- 2 ———, R. Stammlers ≧ Überwindung ≪ der materialistischen Geschichtsauffassung. (1907) in WL.
- 3 ———, Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie, (1913) in WL.
- 4 ———, Soziologische Grundbegriffe, (1921) in WL.